

「こだわり」からの脱出

自己解放を目ざして

市山仁美

1 授業案

一、日時 昭和五十七年八月六日(金)
午前九時半～午前十時半

二、児童 横浜市立大正小学校
第五学年三組(市山級)

男子十名(二十名) 女子十二名(二十名)

一名) 計二十二名(四十一名)

三、領域 構え

四、授業テーマ “こだわり”からの脱出

——自己解放を目指して——

五、授業テーマ設定の理由及び目標

○ 一学期の生活や学習の結果から見て、子どもたちは、こだわりの中にあつて、不自由な状態にあり、自縛からの解放を願わずにはおれなかった。

生活の中でのこだわりは、さまざまあるが、顕著

な例としては、登校拒否の理由のひとつにもなっていた。このA君の例は著しいが、類似した状態は、他の児童にもあてはまる。

そのことから、一学期半ばに、「雨と太陽」(東書)の学習を通して、「恥」をどのようにとらえているかの調査をした。思ったとおり、「恥ずかしさ」のさまざまなとらえ方のあることは理解したが、「恥ずかしさ」からの脱却ができる子は、数少なかった。

こだわりは、感情と構えの不適合によつて起る。この場合、人間には、予断と偏見が生じ易くなる。そして、それが予断と偏見であることの自覚、及び、意識化が伴わないでいる状態を、感情あるいは構えの固執、もしくは囚われと呼ぶことができる。現象的には、その当人の見たもの、聞いたことに対する心の反応の自由さを欠いた特殊限定を、一

般的に、こだわりと呼んでいるのである。

○ こうした耳目と心との諸意的反応を対象として、陥りがちな人間活動を国語教育の中に処理してみようとするものである。

○ 本教材は、まさしく主人公リュシアンのかだわりの軌跡である。この軌跡の跡どりを、自らの現心境によつてとりながら、さらにリュシアン自身のかだわりを解きほぐしていくことが、自らのこだわりをも解きほぐす端緒ともなると考える。

六、指導時間 一時間

七、本時の展開

学 習 活 動 (指示と発問)	指導上の留意点
○ 今日、人間のこ	○ 学習のねらいを知

だわりについて勉強してもらいます。「人間は、なぜこだわるのか。こだわら、どうしたらのがれられるか。」を考えしてもらいます。

○ これを考えるために資料を用意しました。

○ 先生が、大きな巻紙を読みますので、よく聴いていなさい。

○ さて、何かが起こりそうです。

○ では、リュシアンは持っている恐怖心について考えていきましょう。

○ ところで、この赤い線と緑の線は、何を表していると思いますか。

○ さあ、たいへんなことになりました。この先、リュシアンは、どうなるのでしょうか。赤い線かな。

る。(板書、こだわりのについて)

○ 教材文を提示する。

○ 教材文の冒頭部分(前提条件が示されている部分)を教師が音読する。

○ 教材文の第一の区切りを音読する。

○ 今回は、特に恐怖心についてのこだわりを考えると、確認することを確認する。

○ 赤い線は、恐怖心のこだわりの状態、緑の線は、こだわりが解けて安心していう状態を表すということを知る。

○ 教材文の第二の区切りを音読する。

○ リュシアンの行動を予測する。

それとも、緑の線かな。

○ リュシアンは、びくびくしながら、三人の男に話しましたね。

さて、この先は、赤い線でしょうか。緑の線でしょうか。一難さってまた一難。さて、リュシアンは。

○ 良かったですね。この後のリュシアンは、どうしたでしょう。

○ ここで、ひとまずリュシアンのお話は終わりです。この最後の部分には、赤線も緑の線も引いてありません。いったい、ここは、赤線なのでしょうか。緑の線なのでしょうか。

○ リュシアンの不安

○ 教材文第三の区切りを音読する。

○ リュシアンの行動を予測する。

○ 教材文第四の区切りを音読する。

○ リュシアンの行動を予測する。

○ 教材文第五の区切りを音読する。

○ リュシアンの行動を予測する。

○ 教材文第六の区切りを音読する。

○ 子どもが、リュシアンの恐怖へのこだわりを解くことができるかどうかを見届ける。

○ (予想される児童の

になったり安心したりのくり返しが、なぜこんなに続くのでしょうか。

○ では、こうした不安や恐怖から逃れるためには、リュシアンは、どうすればよいのですか。

○ さて、最後に、人間にとって、こだわるとはどういうことを考えてみよう。

○ 今日は、人間はなぜこだわるのか、またそのこだわりからどうしたら逃れられるかを勉強しました。

○ これから、遠くから来ていただいた三

反応)

・リュシアンは、臆病だからだ。

・リュシアンは、いつも恐怖が起これと思っているからだ。

・リュシアンが恐ろしい想像ばかりするからだ。

○ (予想される児童の反応)

・大胆になればよい。

・恐ろしい想像を止める。

・事実を事実としてだけ認める。

人の先生方に一言ずつ教えていただきますしょう。

教材(教科書・教育出版五年下の内容を改めたもの)

町角のライオンがり

シャルル・ルイ・フィリップ

今 西 祐 行 訳

◆プロローグ◆

人通りのなくなつたさびしい町で、後ろに足音が聞こえるたびに、「何者だろう。どうとうではないかしら。」と、その足音が自分を追いこしてしまふまで、びくびくしなければならなかつた。

「どうして、こんなへんぴな町に住む氣になつたのだろう。」リュシアン・ギルモは考えるのだった。いくらのん気なけれど、自分が毎ばんラテン区のコーヒー店で、真夜中まで夜ふかしして帰るとくらゐ、氣がついてもよきそんなもののなのに。

お話のはじまりはじまり

〈その1〉

そしてある日、とうとうおそろしいことが起こつた。その日もリュシアンは、夜中の十二時過ぎに帰つてきた。

オルレアン大通りを曲がつて、せまい小道に入つてしばらくすると、一頭の大きな黄色い犬が近づいてきて、リュシアンをふんふんとかいだかと思つたと、回れ右をして、どこかへかけだしていった。

「ああ、犬でよかつた。犬には、どうぼうやごうとうはいないからな。」

T・〈先を予想させながら、

おもしろくやる。〉

お話〈その2〉

リュシアンは、ほつとして犬を見送つたが、犬のすがたが暗やみに消えると、ふつとおそろしいことを思い出した。最近、犬を使ってどうとうをする、といううわさを聞いていたのだ。あいつはきつと、その犬にちがいない、とリュシアンは思つた。

あいつの主人はどこかで、ゆうゆうとたばこなどふかしている。その間に、あいつは主人に代わつて、えものをさがしているのだ。犬というやつは、りこうな動物だから、おおぜいの人間の中から、金を持つていそうな人間をかぎわけることくらゐ、ちよつとした訓練で、すぐに覚える。今、あの犬は、おれをかぎつけて、主人の所にもどつたのだ。やがて、主人の悪者どもを案内して、引き返してくるにちがいない。

しばらく歩いてリュシアンは、左へ道を曲がつた。

と、はたして、そこに三人の男が立っていた。うすよごれたハンチングに、青い作業服。三人とも、手に手に太いこんぼうを持っていた。足には、音がしないようにだらうか、ゴム底のくつをはいている。「そうだ、やつらを見てはいけないのだ。知らんぷりをして通りぬけることだ。」

リュシアンは、自分に言い聞かせながら通りぬけようとした。ところが、それより先に、悪者どもの方から近づいてきた。

万事休す

「もしもし、だんな、ちょっと……。」

そんな声がしたようだった。リュシアンは、聞かえないふりをして通り過ぎようと思つたが、氣がつくと、三人の大男に取りまかれていた。

お話〈その3〉

「もしもし、だんな。ライオンに会いませんでしたかね。」

リュシアンは、ただもう、おそろしいことばかり想像していたので、男たちがなんのことを言っているのか、さっぱりわからなかつた。

しかし、もうにげられそうにもなかつた。リュシアンは、勇氣を出してきき返した。

「いつたいきみたちは、ばくに何を言いたいのかね。」

「いやあ、これはどうも。……実は、わしらのライオンがにげ出しましてね。いましがた、こつちの道へにげこんだものですから。」

三人の男は、リュシアンが想像していたような悪者ではなかつた。お祭りのために町にやつてきた、サーカスの団長と、もうじゅう使いと、そのしうく係だつた。番人の不注意で、ライオンがおりからにげ出したのであつた。

リュシアンは、あんなにこわがつていた自分はずかしかつた。で、できるだけ平氣をよそおつて答えた。

「ライオンねえ。そんなの見かけなかつたけど、ついさつき、一頭の大きな黄色い犬が、ぼくをかいで帰つていきましたがね。」

お話〈その4〉

「そいつは、やつにちがいないねえ。あいつ、こわか

ったんだな。……そして、どっちの方へ行きましたかね。」

三人は、あいつがにげていった方向を、くわしくきき返した。

リュシアンは、説明しながら、さっき自分の服をくんくんかぎつけていたのが、犬ではなくてライオンだったと聞いて、またおそろしくなった。

三人は、すぐにライオンのついせきにとりかかろうとした。ライオンはまだ、町をうろついているのだ。リュシアンが家にたどり着くまでに、またどこでくわすかわからない。さっきは食いつかなかったが、今度は……。

そう考えると、どうしてよいかわからない。

「あんたたちのライオンは、食いつきませんかね。」

「こわいなら、わしらといっしょにおいでなさるんですね。やつは、わしらには慣れますから、わしらの前では悪いことはしませんから。」

そうするよりしかたがない。三人のあとについて、こわごわ、しばらく行くと、遠くにそれらしいかげが、向こうからやってくるのが見つかった。

やがて、ライオンがりが始まった。二組みに分かれて、家のかげにかくれ、ライオンを近づけてから、はさみ打ちにした。

ライオンは、かべをよじ上ろうとしたり、人の間をすりぬけようとしたが、もうじゅう使いに、やすやすとたてがみをつかまえられてしまった。

お話へその5

「なんだ、ちっともおそろしくないライオンだったのか。」

リュシアンは、やっと安心した。

「おまわりさんに、見つからなくてよかったよ。」

団長は、そう言ってわらった。

※T・発言のたとえです。

「ここで終わってもいいのだが、これじゃ、おもしろくない。次を見よう。」

おりのそばに、一頭の犬がつかないであつた。

「あれっ、これには印がないよ。じゃ、みんなに、どの線か、考えてもらおう。じゃ、どうかな。次を見よう。」

犬は、見知らぬリュシアンに、もうぜんとはえなかったが、今となつては、犬など少しもこわくはなかった。それに、犬はくさりにつながれていた。リュシアンは、自分が初め犬とまちがえて、ライオンを少しもおそれなかったことがおかしくなった。

「ここは、何線かな。」

まだ先があるようだ。」

すると、団長が、犬を指さして独り言のように言った。

「ありゃ、何か言ったんだって、何だと思う？」

わかる人……（一応きく）

「こいつがにげ出したのではなくてよかったよ。もし、こいつだったら、きっと人間に食いついていただろうな。」

「だってさ／＼リュシアンさん、これきいて、どういう

線になったかな？」

※ 今回の授業では、お話へその5までを、巻き紙にして、模造紙に書きました。そして途中で、とめながら、紙芝居風にやるとよいと思います。お話へその5のあとには印がなく、子どもたちに考えさせます。

（しつこくならない程度に楽しく……。）

※印

実際の授業では、赤・青線でしたが、ここでは、赤線（実線）、赤点線、

青線（実線）、青点線、

心電図にたとえました。

2 授業記録

T 今日、皆さんの考えを聞いたりします。なるべく楽しい勉強にしたいと思いますが、楽しいということは、いいかげんにすることではなく、一生懸命やって楽しく、ということなんです。そして、朝、来た時とは、違うものを持って帰って下さい。では、研究会のメンバーを紹介します。上原先生以下十五名が授業をします。

今日の勉強をします。頭の用意はいいですか。今日の勉強は「人間のこだわりについて」勉強してもらいます。「こだわり」という言葉が、今、分らなくても、後で分ってくればいいのですから、「人間は、なぜこだわるのか」「こだわりから、どうしたら逃れられるか」を考えてもらいます。で、これを考えるために、資料を用意しました。

印刷でなく、巻き紙です。先生が読みますから聞いて下さる。

(教材の冒頭部の音読)

さて、何かが起こりそうですね。

次を読みます。

今までの所を読んだね。リュシアンという人の持っている恐怖心について勉強します。

恐怖心って何か知っているかな。

C 知らない。

松下 ふつうの人が恐くないと思って、こわいと思っちゃうの、空想しちゃうの

T こわい、こわいと思う心、恐怖心。

リュシアンの持っている恐怖心について学習します。

先生が読まなかったところで(文章以外の印をさして)印のついているのなかった?

読んだ(範囲を示して)んだけど、読まないところがあったでしょう。(印の意味を問うつもり)

この赤い線と緑の線です。これは、何を現しているのでしょうか。(問)

一人、二人、三人、四人分った。

黙っていてはだめよ。

畠山 赤い線のところは、恐怖心が強くて、青い線のところは、恐怖心の弱っているところ。

山西 ぼくは、ただの赤い線が少し恐怖心のあるところで、点線のところが恐怖心が強いところ。緑の線が恐怖心のないところだと思います。

T 点線は?

山西 ないところ

T ないところ?

徳永 赤のところが強くて、緑のところがなくて、点

点のところが緑のつぎに弱い。

T 点線のところが?

徳永 よわい。

尾沢 赤いところは恐怖心が強くて、点々は弱くて、青いところは安心感がある。

T 次へいきますよ。

さあ、大変なことになりました。この先リュシアンは、どうなるのでしょうか。赤い線かな、緑の線かな。五人

松浦 赤い線だと思う。

T 訳はわかる。

松浦 ……

松下 赤い線だと思うんだけど、通りぬけようとしたところから、またその悪者達が何かしようとするかもしれないでしょ、リュシアンという人が思っているかもしれないから

T はたして……(読む)

T はい。この先は、赤い線でしょうか。緑の線でしょうか。

井手 赤い点線

高橋 赤い線

尾沢 赤線ではじまって、最後の方は緑の線。

T たしかに赤線ですね。

(次を読む)

もう少し先まで読みます。

(第三の区切りまで音読する)

さっきの予想はどうだったかな
一難去って、また一難。さて、リュシアンはどうなるかな

(第四の区切りまで音読。)

さあ、その先はどうですか。今まで犬だと思ってい

たのが、ライオンだったんでしょ。

山下

徳永 緑だと思う。飼育係の人と一緒に安心していられるから。

T 次に行きます。音読

確かに、安心の方でしたね。この後リュシアンは、どうしたでしょう。

一応ここでストップ。この最後の部分は赤線も緑の線も引いてないの。いったいこは、赤線なのか、緑の線なのか考えて下さい。

Tu ちょっと(進行について、児童が充分について

けるか、わかっているかを確かめるために発言をする)市山先生は、体が強い人ではないし、寝てないし、頭の回転もよくないから、私が代わりますね。

今日の話は、上に赤線、緑の線が書いてあったから、読みやすくしてあったわけです。あの線はみんなが言ってくれたようなことでもいいんです。もっとすばらしい機械なら、怖いと思っているとき、だんだん赤が薄くなってきた、そしてだんだん薄くなってくる。すると、今度は緑に変わっていくというようにできたのですが、……。

さあ、このへん(お話へその4の途中の変化をさして)

から赤線が点線に変わってきているからみんなが言ってくれたように、びくびくしながらも、なんとか安心がでてきたんだね。

そうしてライオン狩りが始まった。そうするとライオンは、壁をよじ登ろうとしたり、人の間をすりぬけようとした。

猛獣使いにやすやすとたてがみをつかまえられてしまったんだからよかったことになるんだね。

そのときリュシアンさんは、「なんだちつとも恐ろしくないライオンだったのか」と言った。だからほんとうに安心したんだね。

そうするとサーカス団の団長さんが、

「おまわりさんに見つからなくてよかった」

と言った。もうお話はだいたい終わりに近づいてきたけど、これで終ってしまつてはあんまり勉強がやさしすぎる。五年生なんでもんね。さあ、この紙芝居はどうなるでしょうか。

おりのそばに一匹の犬がつないであつた。ここには何も書いていないね。

安心して、そしてふと見たら犬がいた。だからここに恐怖感も安心感もないのです。さあ、これでは終われないね。

犬がつないであつたことは、よけいなことだものね。もし終るのなら、ここで(お話(その5)の)おわりのところをいう)切つてしまえばいいのだから……。さあ、まだ何かつづきそうだね。今、ちらつと見えたから言つてしまふけど、緑がでてきたんだよ。犬は見知らぬリュシアンに猛然と吠えかかった。もう緑の線は点線ではないよ。

——ところがリュシアンに吠えかかったが今となつては少しも犬など怖くなかつた。それに犬は、鎖につながれていた。リュシアンは自分が初め犬とまちがえてライオンを少しも恐れなかつたことがおかしくなつた。——そんなことまでリュシアンは考えるようになっていました。ずいぶん余裕がもどつてきたね。——すると団長が指をさして独りごとを言つた。——ここはなんだか切れたね(緑や赤の線が切れていることをさす。)

さっきの犬を見たときと同じだね。

さて、ここでは終われないね。

あんなに沢山あつたのが、こんなに少なくなつてしまつた。どうやらおしまいのようだね。この後ろを種明しすると、団長さんが何か言つておしまひになつてゐるんだ。さあ、いくよ。——こいつが逃げ出したんではなくてよかったよ。もしこいつだったらきつと人間にくいついていただろうな。——これでおしまひ。

さあ、みんななら、ここは何色にするだろうか。恐怖心か? 安心か? 手を上げて(あがらない)さあ、どうだ

それでは、かたつばしからあてていくことにしよう。

一人目、赤。 二人目、緑。

三人目、赤。 四人目、赤の点線。

五人目、赤。 六人目、緑。

七人目、緑。 八人目、赤。

九人目、緑。 十人目、緑。

(以下続く)

Tu それではちよつと手を上げてもらうことにしよう。

赤だと思う人……十二人

赤の点線だと思う人……三人

緑だと思う人……八人

緑の点線だと思う人……一人

どれにも手をあげなかつた人はいないかな? そういう人がいてもよかつたんだよ。それでは、市山先生に代わります。

T リュシアンは、ここに来るまでに随分赤くなつたり、緑になつたり、繰返ししましたね。それでは、なぜこんなに繰返ししたのでしょう。

先生も寝不足と新しいことをやるびくびくで、赤く

なつたり、緑になつたりしたけれども、そういう「なぜだろう」というものを探して下さい。

松下 なにかのお話は、安心する場面があつたり、安心しないですごく怖くて、びくびくするような場面がどんどん連続してくるから、なにか、そんな風に赤くなつたり緑になつたりしてしまつた。

T 事件のせいだという訳? いろんな事件が起こりすぎたというわけね。……と松下君は言いますが……。松下君の意見でみんな「うん」じゃだめよ。

尾沢 たとえば犬が登場した所では……(少し考える)ああ、ともかくそういう風に見るものを想像してしまつていうのか、見たものをまだ起きていないことに想像してしまつて、もしあなつたらどうしようっていうことで赤くなつたりした。

T みんな意味わかつた? それじゃ徳水君は、徳永 僕も尾沢君と同じで想像のしすぎだと思ひます。

T 今の所は、色々な事件が起こりすぎるからだというのと、想像して「もし」と考へてしまふからだというのが出ています。

君は?

岸 同じです。

佐藤 想像のしすぎ

T どんな? あなたのいうことを言つてごらんさ。い。ただ想像のしすぎというのでは、その人がこの人を真似したのかどうか先生には解らないから、だから、あなたが何を思つているか通じるように先生に言つて。

佐藤 怖い事の想像のしすぎ。

T 結構。

山下 怖いことや安心することの想像のしすぎ。

徳永 怖いことを想像していくから怖くなる。

Tu こういう意見がでているけど、ここで少し止まって下さい。どうしてかというと先ほど赤の線、緑の線とくり返して来たね。それでどうしてあそこで終っちゃうの。怖いこと、安心したこと、このくり返しのあとで話は終れるのかい。ずーと続いていくのかい。それを考えてほしいのね。このお話はあそこでおしまいなのよ。なんであそこで切ってしまうのかな。お話はおしまいなんだよ。もうあととは長いからカット／ですか？

人生というのは、様々な出来事に基づかります。君たちは生まれてから何年たつの十年？

これからまだまだ大きくなっていくんだし、それに恐怖、安心というものがくり返されていくんだよ。くり返した人がたくさん、後にいっぱいいますからね。それじゃなんでこのお話は、あそこで切れちゃうのかな。このあとまだ続いていくのに、めんどろくさいからといってやめてしまったのかな。そうじゃないだね。最初に市山先生も言ったように、今日は「人間のこだわり」について勉強しているんだね。けれども、この物語に入りすぎて、このことをみんな忘れていたね。でも、そうとばかりいえないんだよね。

赤い線、緑の線のくり返しのあと、最後の所でみんなの答えは、赤い線、緑の線、点線、とバラバラでした。だからあそこは、単に赤がずうっと続いて、緑になる。落着く。そうすると、今度は、また赤い線に交代だろうなんていったら終わらないね。そうすると、ここは、ついうっかり赤い線です。緑の線です、といってしまったんでは、実は、よくないんですね。

(めずらしい授業に参加して、参加したいが、充分なことを考えられないとき、とりあえず、前の子のいったところで、反応して、初めの課題を忘れてしまいう児童が多いので、反省の機会を持たねばならなかった。今日は、いつも突破口になって発言してくれる児童が他の用事へクラブ等へで出席していないため、いつもと違う児童が常よりがんばっているが、仲々の得たところに進んでいかず、本人達もやや焦っているようだ。コントロールと方向をきちんとする必要がある)

じゃあ、点線だといいいのか。さあ考えて／

Tu 君たちはすでに十年生きた。これから後の人たちのように、怖いこと、安心したことをくり返して行きます。それが、人生です。——ってな風にだけここで言って、おじさんは帰りたいのですよ。それでは、きみたちは怖くてしょうがないでしょう。

このくり返しが、この先ずうっと続いていくのかと思うと、もう生きていくのが嫌だという人が出るかもしれない。

さあ、ここで、どう考えるのがいいのかという勉強をするんだよ。
さあ、どうだろう。

T という訳で、リュシアンさんは、このように恐怖、安心をくり返してきました。なぜなのかと、よく考えないと、永久に続き、紙はどこまでも長くなってしまうわけです。

その訳は上原先生に言っていました。

それでは、なぜこんな風にくり返すのかと考えてみて下さい。

ヒントはさっきもいいましたが、先生の場合は、さつき(はじめのところ)は、うまくいきませんでし

た。というのは、寝不足と大勢の方が見に来ているということ、うまくいくのかなあ、いかないのかなあと考えて、赤くなったり、緑になったりしたのです。つまり——こだわってしまったのです。それを上原先生がバトンタッチしている間に汗を拭いて安心したわけです。

それでは、リュシアンさんは、どうしてくり返したの尾沢 一番最初の所に引越してきたと書いてあったけど「なんでこんな所へ来ちゃったんだろう」って言うてたから、それが元じゃないのかなあ。

T それは事件でしょう。

そうじゃなくて、リュシアンさんの心の中というのはどうなの。

君の言うのは、心の外側ということですね。リュシアンさんの心の中にあるものを探してちょうだい。

一つは出て来たわね。いつも想像している。——いったい何を？ よいことを？

みんな 怖いこと

T 恐怖心が起きるようなことを想像したのね。他にないかな。(少し間)

それでは、この人は元気はつらつの人かな。どう？
みんな そうは思わない。

T それが、ヒントよ。

C ライオン狩りの時も、飼育係の人といっしょにいたから。

T そういうことは、どういう心なの

C 弱い心

C 弱いつていうか、意志が弱い。

T 一人発言したからって、「もう安心」じゃだめよ。(今日の授業では、いつも活躍している人達が都合で留守のため、常には人のを聞いて済ませている人

や人の発言を待つて多少のアレンジで済ます傾向もあるので、再三の注意をすることによって、一歩前に進めてやりたい。特にこの中に「こだわり」の多い子が含まれていると考えている)

今日は怖いという心について考えているんだから。こわい所で意志が弱いとはどういうことなのかとみんなが使うことばがあるじゃない。

松下 臆病。

尾沢 人間のこだわり。

T 臆病が潜んでいるから、いつも怖いことが起こるものだと思像してしまうんですね。

想像は、いつも、必ず安心ではなく怖い方へはたらいっています。

これが、リュシアンさんの心なのよね。だから、何ですか？

松下 リュシアンさんという人は、一つの事にこだわる時は、必ずいい方へ考えないでこういう悪い方に考えてしまう。たとえば、最初に犬がいた時、初め安心していただけ、急に強盗に犬が使われているということを思いだして、ふるえてきた所からわかります。

T みんなが、いろんな事を言ってくれたので、どうしてリュシアンさんが繰り返したのか、これで、も

とが分ったわね。
それは、臆病だからで、必ず想像は悪い方へ行つて、いつも「こわいことが、起きるんではないか」と、おびえていたということですね。

このように、いつまでも、怖い、恐ろしい、ということが続けるわけにはいかないでしょう。

そこで、君達の知恵を借りて、こういう繰り返しから逃れるためには、リュシアンさんはどうしたらよ

いと思いますか。

関根 松下君の言ったように、いい方に考えたり、「こんなことは怖くないんだ」とかそういう風に考えていれば、強くなれるんじゃないかと思えます。

T 「考える方君を いい方に変えろ」っていうのね。

松下 変なこの場合は、あんまりこだわりすぎないで、少し考えたら忘れるようにしたいのと思えます。そんな、いつまでも怖がったり、こだわったりしていたら、ほんとにもっと良くないことが起きたとき、家の中から出られなくなっちゃう。

T 「忘れろ」っていうわけね。

2つの知恵がついたね。

管野さんは？ 自分のために考えて。

(前の子の言うことでは不充分だと思ひ指名する。) 管野 ちょっとでも怖いことがあったら、すぐ想像することをやめる。

――間――(この子は、これでは日常不満が残るのではないかと思うのだが……)

怖いことがあったら思いださない。

(結局、ここへ妥協してしまう。)

渡部 怖いことばっかり考えないで、考えるんだしたら、いいことを考えたり、もっと自信を持つてやればいい。

(この子の場合、この言葉の通り日常を過ごしているのではないかと考えられ、思いあたるのであるが、管野さんの間についてのための答えには、ならなかった)(この辺のところしか、今のところ出ないと考えられる。そこで、)

T さあ、色んな知恵が出ました。リュシアンさんは、そうやっていれば逃れられる。というのが五年三組の知恵でいいのね。(「のがれる」ということを

「逃げてしまう」ということと同義に考えているようだ、そこにクラスの子の考えが集まってしまっていることを確認した。)

Tu みんなは知恵を出してくれたが、おじさんは、これではだめだと思ふ。

今日は、人間のこだわりについて勉強しようとしてきた。そして、色んなことを考えてくれましたが、人間は、どうしてこだわってしまうのかというのが今日の学習のわけです。

それから今度は、どうしたらそのこだわりからののがれられるか、ということを考えました。

「こだわらないこと。」これは、一番いいね。けれども、いいといってもこだわってしまうのが「こだわり」じゃないの。だから、おじさんは「これではだめなんじゃないかなあ」って聞いていたの。

これは、リュシアンさんだけの問題ではないんだよ。「そんなこと忘れてしまえばいい。」と言われても、忘れられないのが、「こだわり」じゃないかな。「怖いことを想像しない。」できますか？

「自信を持て。」――「おれは強いんだ」と思っても震えてしまうんじゃないかな。それでは、どうしたらよいのだろうか。ちょっと知恵のある人は、すごい。

「君は怖いことばっかり想像しているよ。想像するのをやめなさい。」その時、いいことを言ってくれたなんて思えますか。

「そういつてもだめなの。僕は怖いと思っちゃうの。」――ね。

「わすれなさい。」「わすれられない。」――ね。

「自信を持ちなさい。」「自信が持てないの。」
こういうものが、こだわりなんだね。しょうがなく、

こういうものがずうっと繰り返ししていくのかな。

人間は浮き草が波にただようように、浮いたり沈んだりして生きている。あきらめちゃう。後にいる人や他の大人の人は、あきらめちゃうたわけね。おじさんは、原爆でやられたんだよ。これもあきらめちゃった。

この問題はむずかしいけど、何か解決しなくちゃいけないね。こういう勉強をしてみようと思っただ。

T 今までの四つの話は、だいたい元気はつらつタイプが多かった。そのために言われてしまいましたが。

浜野さんならどうする？

どちらかと言えば悩む方でしょう。

浜野 ……。

井手 楽しいことがあったら、それで何とか怖いことを流してしまおう。

T 忘れることはできないっていうわけね

(まだのがれるとにげるを混同していてそこから出られていない。)

石井さんは

石井 ……。

T 忘れることはできるの？

石井 できない。(口ごもる)

T できないけど？

石井 全部忘れることはできないけど、あまり考えないようにして、いい方を少し余計に考える。

佐藤 忘れることはできない。

枝 怖いことを考えないで、楽しいことを考える。

(三人共、本音を言っているのだが、それ以上に出られずにいる)

Tu ちょっと待って、おじさんは、それはだめだと言ったでしょう。

「怖いことは、もう見ない。あっちが面白い。」――

そういう人たちが世の中に多いよね。いやなことは放っておいて、楽しいことばかり追っかける。

だけどそれでは、決して怖いこと、苦しいことは、かたずかないのです。

又楽しいことの中から、怖いことが出てきたら、くり返しでしょう。

だからだめなの。どうしたらいいのか。おじさんは最初に言ったよ。

「こだわっている」んだね。

「こだわっている」から「こだわらない」というのが、一番いい答えなの。

「こだわらな」ということが、どういうことなのか、考えなくちゃ。これをやるわけにはいかないね。」

怖いということが、どういうことなのか考えなければ、怖いことから、のがれることはできないということだ。そうだろう。心に悩みを持っている時、その悩みからのがれるには、その悩みを解決する以外

はない。

おじさんは、肺病患者でもあるんだよ。原爆でやられてね。それでもなおかつ生きていられるのは、手術して取っちゃったからだだよ。

だから、今、君たちのやっているのは、「こだわらな」という脳の中の病を取り出して、それを捨てるという

こと以外ないじゃないか。

T いっぱいリュシアンさんの同類がいる、ということ

とがわかりましたね。

そして、今までは、忘れられないから、それを少しにして、他の方へ逃げていくとって、のがれるの

ではなくて、結局あるがままに放っておいた。

そちらも一緒に解決するわけだから、どうする？

山西君。

山西 ……。

T 山西君を含めて聞くけど、なぜ繰り返ししたかって、ここ(黒板の文章のこと)に書いたでしょう。

これを眺めて考えて。

山西 ……。

T それでは、「想像する」ということは何なの。その人の頭の中と外にある事件と…考えることが等しいの？

C 等しいんじゃないくて、それは、自分が考えたことだから、ほんとうにそうだから分らないけど、一応自分が思ったことで、外のこととびつたりではない。

T リュシアンさんは想像のしすぎでしょう。そのことと外に起きたことは、同じではないんでしょ。これが、ヒント。考えて。

関根 怖さに耐えるようにする。

T 怖さはあるのは、認めて、耐えればいいというわけね。

松下 自分が思ったことと、本当のことが違う場合は、等しくすればいい。

だから、自分が、本当にそれはそうなのかという風によく考えてみて、もし本当にそれが恐ろしいことだったら、別に恐ろしいでもいいけど、もし別にそれが恐ろしくないのに恐ろしいと考えていたら、本

当に恐ろしくなっちゃうから、本当にそうか、自分でよく考えてみてから、恐ろしいかどうか判断する。

T みんな、何を言ったかわかる？

自分の世界と外の世界は違うんだから、等しくすればいい。

外の世界を変えるわけにはいかなから自分の世界を等しくすればいい。

ということは、怖いことが起きても、怖がらずにがんばるといふわけじゃないだね。怖いことは、怖い。ね。

他の人は、自分の言葉で言ってみて。

尾沢 自分の世界では、自分が王様なんだからその世界を動かして、外の世界と等しくできる。

T 二人の自分の意見が出ました。

どんどん想像し過ぎていくのを等しくすればいいというわけ。いいですよ。

畠山君は？

畠山 外の世界と自分の世界をあわせながらやっていく。

T ありがとう。佐藤さんは？

佐藤 外の世界に自分の世界をあわせていく。

T ということは、何だろう。(注意しないと前の人通りに言うだけで内容が伴わない場合もあるの、考えを深めるため)忘れるわけでもないんですよ。

佐藤 いい方の世界にあわす。

T ちょっと待って。外の世界に合わすんでしよう。

それで、忘れるのはだめと言ったのね。いい方の世界って外にあるの？ どうなの？

いい方に考えるとか、いい方に思うとかは、外の世界ではないでしょう。

おかしいわね。

あなたは、なぜだかわかった？

今まで、色んなことに悩んだことがわかった？

外の世界に合わせているつもりなのに、いいことを考えるっていうのは、自分の心の中のことでしょ

う。外の世界ではないのよ。原因はどこにあるかわかった？

悪いことを考えるのも心の中でしょう。

山西 自分の世界のことを外の世界の怖いことやうれしいことにあわせて、外の世界もあつ怖い、あつうれしいと思って、外の世界に自分の世界をあわせていくうちに、だんだんそういう所がなくなつて楽しく暮らせるようになると思います。

T もういいわな。ここで、まとめたから。それでは、最後に、

「人間にとって、こだわりとは」どういうことか。

徳永 一つのことを深く考える。

松下 一つのことを色んな想像をして、たとえばこうじゃないかと、やっぱりこうだなあと、一つのことと長い間、何日もこう思ったり、ああ思ったり事件を考えること。

Tu 五年三組は、ずい分こだわっているんですね。九時四十分から十一時まで、ずっと授業が続きました。こういうのをこだわっているというの？ 深く考える。

夏休みに、五年三組は、「人間のこだわり」について、大いにこだわり続けました。

T 深く考えるということは、気になることで、それは切つて捨ててしまわなければいけません。ということになつてしまふ。ね。もうちょっと考えてみて、捨てるべきものなのでしょう。それがわかるように言つて。

山西 自分勝手に想像して、このことをあだこだうだ思ふのをこだわりだと思ひます。

江崎 ……。

T 君の言い方で考えてね。枝さん。

枝 ……。

T せっかく出たヒンとが使われていないよ。

枝 ……。

T 考えといつてね。関根さんは。

関根 ……。

T 又、まわつてくるわよ。尾沢君は。

尾沢 ……。

T それでは山西君の言つてくれたことで終りにします。尾沢君で終りにしようと思つたけど……。

人間にとってこだわりとは、山沢君の言つてくれた、自分勝手に……

山西 自分勝手に考えて、あだ、こだ、いつまでも思ふこと。

T それをこだわりというわけね。

今日は人間はなぜこだわるのか。又そのこだわりからどうしてのがれるか。という勉強をしました。ごくろうさまでした。

――― 遠来の先生方のお話

石本先生

東京で小学校の先生をしています。

なんで今日ここで先生が話をしなければならぬのかというと、実は、くじを引いたのです。それに当てしまつたわけです。

先生が面白いなあと思うことは、多分この研究会の中で、自分が三本の指に入る「こだわり人間」だと思ふことです。もしかしたら一番かもしれない。それがあつたから、何を話そうかとやっぱり考えてしまひますよね。その一考えるほど、こだわりになつてしまふんだということです。

「わかつちやいるけどやめられない」というのが昔あ

りましたけど、そういうことなんです。

先生は、こだわりって、こういうことだと思っくんです。それは、底なし沼みたいなものだと思っくんです。

底なし沼って知ってる？ 底がないから落ちるとどうなるの？ どんどん沈んでいってしまっくんでしょう。どうすると早く沈んじやうの？ もがけば、もがくほど早く沈んじやうでしょう。それで、そうじゃないかなって思っくんです。何かにこだわっている状態というのは、いっしょうけんめいもがいている。そして、どんどん沈んでいってしまっくん。こんな状態じゃないかなって思っくんです。それから、もう一つ。

先生、みんなといっしょにやってみてまして、気がつくのは、割合、みんなこだわっているということ意識してないと思っくんです。自分が何にこだわっているのか。自分で発見してみて下さい。

そのこだわりをつくる原因がわかり、その解決になるんじゃないかなと思います。

自分のこだわりって何か。それを見つけて下さい。

飯住先生

先生は、横浜の磯子の小学校にいます。

今日は、みなさんが、だんだん勉強に真剣になっていくのがわかりました。最後に、問題をちよつと出してみます。

先ず最初にね。

「すねたことがある人、手を上げて。」全員それでは、五年生になってすねたことのある人14、すねるということは、こだわりなんでしょう。今日勉強したこだわりに近いんじゃないかなと思っくん。13はい。いいよ。こだわりじゃないと思っくん。一人。いいよ。それでは最後に、とっておきの質問。夜一人でトイ

レに行けるかどうか今から調べます。

みんな顔をふせて。で、おかあさんたちで、自分のお子さんが前におられる方は、正直に裁判官のつもりで手を上げて下さい。

はいよし。一人いた、二人いた……四人、

あれ、まちがえた？ 君たちも手をあげるんだよ。

やりなおし。

——はい。今は、一人も手を上がなかったけど、手を上げるのにこだわった人はいないだろうな。

「こんな質問で手を上げるとみつともない。」リュシアンさんも、そんなことがあったな。

三つ目の話は、みんながこれから六年生、中学生となっていくときに、一番こだわってほしいことをいいます。

みんな右手をあげて、手のひらを見て。その手が自分の手だと思っくん。左手をあげてごらん。——はいよし。みんなが手を上げてくれたけど、みんなばつ。まちがい。

みんなの右手はみんなのじゃないんだよ。

その証拠に、次の質問をします。

その右手の形を作ったのは、だれですか。自分の手は、自分で作ったと思っくんはいけな。おかあさんとおとうさんが作ったんでしょ。それでは第二問。幼稚園の時と比べて、自分の手が大きくなったと思っくん手を上げて。はい、いいよ。

自分の手を、自分で大きくした人、手を上げて。おかしいな。自分達さっき、右手は自分のもののだと言ったのに、大きくもしなけりや作りもしないじゃないか。大きくした人だれ。

ところが、先生の手は、きみたちより大きいでしょう。私も五年生のときは、指の長さが、この位だっ

た。この伸びた部分は、自分の手です。ここから下は、おとうさんとおかあさんのです。ね。

これからみんな自分の手を大きくするのは、もう、おとうさんやおかあさんの力ではないんだよ。

でも、おおもとを作ってくれたのは、おかあさんとおとうさんなのです。

そのことだけは、いつまでもこだわり続けて下さい。

山本先生

今日は、お話というよりは、お礼をしたいと思っくん。遠い山口県から出てきて、よかったなあと思っくんしました。

さきほど、色々な先生がおっしゃったんですけど、こだわりっていうのは、子供だから大人だからとかいうのではなくて、大人だって、子供だってあることだと思っくんです。

それで先生も、本当にこだわる人間なんです。

今日、いっしょに勉強してきて、みんなの中から、「怖い時には、怖がればいいんだ。」という言葉が出たというのは、何か教えてもらったなああって、とてもうれしい気がしています。どうも

(注)当日都合があつて児童の参加が二十名しかなかったことが惜しまれる。しかし、本人の都合がつかないのでおかあさんだけの参加もあるなどうれしいこともありました。又、結論を言ってくれた山西君が、「頭が本当に痛くなる程、考えさせられたけどちよつとも嫌じゃなかった。」と言っていたとおかあさんの報告がありました。

Tu・上原輝男(玉川大学教授)

T・市山仁美(横浜・川上小教諭)